



ひとこと

おかげさまで会社も私も しっかり生きています

東京アトマイザー製造株式会社 海老原 尚

春まだ浅い小雨まじりの中、名もなき山々を分け行ったそこに、アサダメッシュ(株)鹿兒島工場が姿を現す。協会史に残ると、高名な先生方も口々に評された合同分科会の第一会場だ。線径11 μ mという可視限界のステンレス糸が、840meshの精密金網に織り上がる工程を、存分に見せていただく。殊に原糸の検査と半自動の仕込は、世界に冠たるニッポンならではの、きめ細かさと感じた。つづく日本澱粉工業(株)鹿兒島工場でも、現場の隅々まで案内され、研修と有事への備えという5直3交代の成果や、保守スキル体内化道場をも披露していただいた。日本の製造業を支える、比類なき基盤技術の一端を学べたことが、何とも喜ばしい。

かつて私は、数年かけて諸外国の展示会に赴き、本業の粉碎機を隈なくチェックしたものだ。打ちのめされるほど高い壁を感じる、圧倒的な存在感の高速ハンマーミルを、この眼で確かめなかったからだが、ごく一般的な製品すら存外に少なく、ターゲット粒径を同じくする微粉碎機といえば、ピンミルと分級機構内蔵型ばかりだった。

丹念に回っても空振りが重なるショックは大きい。小規模でも、高速ハンマーでは国産最古の矜持から、社名さえ頑なに守り通してきた歩みは、どこかで針路を見誤ったまま、市場性とは的外れな方向を、愚直にひた走ってきたミスリードだったのでは、という愕然たる思いだ。それ以来、かかる不安にさいなまれ、自問自答を繰り返す。

だが、不遜にも電車道を願って命名したミルスターダムが、採用例を積み重ねるに伴い、この疑念は、比較データが見事に晴らしてくれた。その立役者こそ、片持型では世界唯一の外周粉碎機構である。実像は、近刊「粉碎とエコ・リサイクル」の拙稿に詳しい。この温故知新の宝刀を、たやすく風化させぬよう、還暦にあたる創業60周年の今年は、身の丈も忘れ、高らかに謳わせていただく。

ミルスターダムは、原薬など弱熱性素材を、分級機構内蔵型の微粉碎機に匹敵する平均粒径にでき、品種替時の完全分解洗浄と再組立は、ゆうに2割未満に短縮できる。より高周速のピンミルに比べ、スクリーンを外してさえ、粒度分布・排出温度とも好結果を出せることが多い。一方でトレンドな無機材料への適性など、未達の課題も隠せないが、納入先の皆さんをワシづかみにする使いやすさの源泉は、正に外周粉碎にあると言えよう。認知度こそ低いですが、これは、臆せずに堂々と証明できる。

日本の粉碎機は、欧米を範に伸長するも、多くが国産化ライセンスそのままに販路を拡大してきた。海外に類を見ない独創的な改良を加えられた例は非常に少ない。高速ハンマーミルも、高度成長期にベストセラーとなって、いち時代を画した結果、オペレーター目線での進化を競うことなく、違う製品の導入につれて陳腐化し、堅牢で安価、動力の割に処理能力大、という昭和のエコ製品の配役に甘んじて生き残ってきた。末席に等しい分際で横綱相撲を望んでも、軽く一笑に付されようが、現代の多品種少量の粉碎に、ミルスターダムほど高適性の微粉碎機はない、と宣誓できる。いまだ構想の域を出ないが、外周粉碎をより昇華させ、我が日本から発信する白眉の高速ハンマーとして、近い将来、ミルキングダムも世に問いたい。

私ごとながら、3年前に、交通事故で4ヶ月も意識不明の植物人間になったが、奇跡の生還に恵まれ、不自由なれど介助なしに働けるまで、快復できた。本誌を拝借し、ご厚情を授かった方たちに、改めて感謝申し上げます。一度失いかけた命、自身のためのみならず、利他的な業務にも心して励みたい。

えびはら ひさし
海老原 尚

東京アトマイザー製造(株) 代表取締役

〒302-0005 茨城県取手市東4丁目4-31

TEL : 0297-72-2178 FAX : 0297-72-8477

E-mail : 3955_m-ebihara@tokyo-atomizer.co.jp